随想

あなたの職業は何ですか？

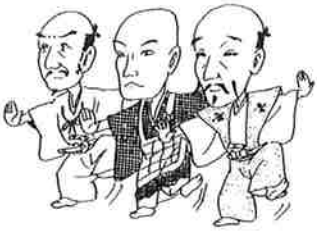
中世佐伯一族と「7人の侍」

戸山恵子
（会員　佐伯市匠南区）

この合戦（日向耳川）で戦死した人数、百二十余人。名前がわかっているので読み上げまーす。

「佐伯掃部助、長田左京亮、塩月内記、本越右近、泥谷監物、柴田図書、神志那左近、広末与左衛門、深田十郎兵衛……」なお、豊後に引き上げた人々もついでに「長田下総入道天楽、高畑宮内少輔、杉谷帯刀、奈須右馬之丞、柳井備後守……」

フーッ、8月3日（木）渡町台公民館、郷土の歴史教室、講師は佐藤巧氏、午後3時50分頃のこと。佐伯宗天と大友宗麟のテーマで、お話もいよいよクライマックス。大友軍の敗北、佐伯宗天父子と家中百二十人が戦死した物語りです。家に帰り、もう一度名前を見てみました。それから「佐伯市史」「中世佐伯一族の興亡」等を読みこの時代の少し前に佐伯惟治に従って討ち死にした人々、後には惟定に従って伊予に渡った人々と、きちんと名前が残っているのには改めて驚いてしまいました。一人一人を声に出して読むと今さらですが気付くことがあります。泥谷・柴田・広末・菅・橋迫・宮脇・高司…等は今もある姓です。中野・津井・谷口・古市・小倉・恵良等は今も残っている地名です。地名が姓字になったのでしょう。龍護寺・河俣寺・宗徳けいそく坊等、僧侶らしき人の名字もありました。



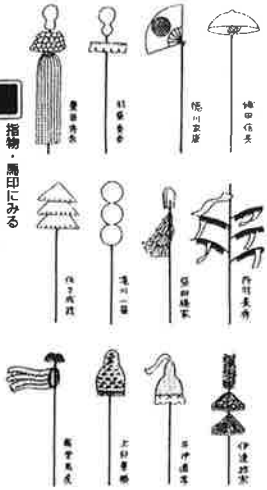
戦いに勝ったり負けたりの結果で伊予に渡ったり、主君と共に討ち死にしたりで戦国時代って、えらいこっちゃ…しんどいなァ…、本人はいいとしても、この人たちの家族はどうしてたんだろう。そもそも、戦のない日常の生活は？と、素朴な疑問が生まれてきました。き

まってるじゃないの、武士なんだから馬や弓の鍛錬じゃないの？と考えていたのは数年前の私。教科書はこういうことは教えてくれなかったし、基本的な錯覚をしていたのは私だけ…かなァ。

彼らの（中世の佐伯氏、その一族、及び家来たち）職業は農業、身分は武士、戦いのない日常は田畑が仕事場だったはずです。武士と百姓（農民）は同じでした。だから彼らには名字があるのです。こんなあたりまえの常識が実はつい最近まで理解していなかったのは、テレビの時代劇があまりにも一方の武士の面だけを描いていたからでしょうか。戦国時代はトップクラスの人物とその回りしか出てこないからすべての武士が、（例えば）秀吉や信長、あるいは一豊と同じ日常生活をしている錯覚をしてしまいがちです。武士が武士のみの職業に専念できたのは江戸時代からです。士・農・工・商という身分が確立したからと学校で習ったのですが、もう少し前、秀吉による「刀狩り」が行われていますよね。一体、誰の刀狩りをしたか…、お百姓の絵が書かれてあったのを覚えています。実はアノ絵、今に生きている私たちからみたら、お百姓が刀を役人らしき人にさし出している様子なんですが、当時はあのスタイルが武士の普段着だったはずです。刀狩りは「もう武器を持たなくてもいいゾ、オマエたちの土地と安全は武士である自分たちが守ってやるから」から刀をクワに持ちかえて百姓は百姓の仕事のみ専念しなさい、というパフォーマンスだったのでしょう。専門職として武士と百姓が区別され、その証拠に江戸時代に起こる百姓一揆、彼らが手にしているのはムシロ旗やカマ・クワ類です。旗さし物と鎧・刀で戦ったことはとうに昔のことになっていたのでしょう。

では、中世佐伯一族に例えるなら、どこでどういう事情で武士と百姓は別れたのか？……主君が殺されたり（惟治）、伊予に逃げたり（惟常）耳川の戦いで討ち死に（惟教）、主家そのものが領地を没収された時（惟定）…等々、武士自らが決断し、農業専門になり、江戸時代、そして現在に至ったんでしょう。だから、何があろうが日常生活そのものは急変しなかったのではないか、自分の土地を持ってれば食べていけるし、たとえ移住しても農業する技術は持っていたから、一からの出直しがきいたのではないか、そう思えます。

15代惟定が改易となり少人数で宇和島の藤堂氏の元へ去った直後、毛利氏が専業武士団をひきつれて佐伯に移り、新しい城下町を作るようになりました。時代は丁度武士と百姓が専門職として分かれた江戸時代の最初でした。旧領民と新領主との間にいさかいが起こらなかったのは、佐伯氏そのものが改易とはいえ主君大友氏に連座したもので、討ち死、逃亡のたぐいではなかったことも幸いして居住権選択の自由はあったろうし、新領主の毛利氏も佐伯氏家臣団には懐柔策をとり、庄屋・名主として上手に治めてきたから江戸時代を通じて、これといったイザコザもなかったのでしょう。（土佐の山内氏と長曾我部氏のように新旧の領主・領民が仲が悪いのが普通ですから）



指物・馬印にみる個性の演出の名人たち

（閑話休題）

そんなこと考えていくと、あの有名な映画「七人の侍」日本を代表する名作らしいのですが、とっても変だなぁってことに気付きました。三船敏郎や千秋実、志村喬各氏が着ている物と治安の悪さからして、江戸時代以前の戦国時代、もっと前の中世が時代設定と感じていましたが、この「七人の侍」のいた時代は、日本の歴史上なかった。全くのフィクションだったことに気付きました。

彼らの服装は江戸時代です…が、治安の悪さからして絶対、江戸時代ではありません。

治安が悪いとはどういうことか、現代でいえば電話してもパトカーや救急車が来ないことです。警察はあってもそれがきちんと機能していない状態ともいえます。今日（9／14）同じ歴史教室で「御朱印道中と随行した藩士の暮らし」というテーマで、江戸時代の旅がいかに安全なことか、現代人でもお金と時間と体力さえあれば十分可能なことを教えていただきました。大名にとって、自分の領地に「七人の侍」に出没する盗賊がいたなら、それこそ改易、お国替えにつながるからです。

では戦国時代かといえば、これもノーッ！です。百姓が自分の生命財産を守るために武器を持った、それが武士のはじまりです。平安時代の終わり頃、貴族を守るために突然出現したかのように…学校で習った気がしますが、その元の元は土を耕す百姓だったのです。中世の百姓は「ヤワ」ではなかったんです。ごく一部のトップクラスの武士以外は、百姓をして生計を立てていました。だから中世は大きな城下町もないし、家臣たちはそれぞれ自分の土地で生活し、いざ戦となると武器を持ってかけつけていたのです。「いざ鎌倉」という言葉がありますが、ふだん領主の傍にいない証拠ですよね。佐伯氏の居館がはっきりとした年代別にわからないのは、元々城主と家来は別々に生活していたからなのです。

近世城下町の地域構造

百姓だから戦の経験がない、だからプロの武士である「七人の侍」を雇って盗賊たちから自分らの生命・財産を守ったという事実は、日本の歴史上、ナイのです。「七人の侍」は全くのフィクションのゆえんです。

（おわりに）

秀吉が刀狩りを行い、家康が士・農・工・商の身分（職業）を分けるまえまでは、百姓と武士とはっきりしたものではなかった、逆にいえば、それだけツブシもきいたんです。宇和島や津に行こうが耳川で家族の誰が戦死しようが、土地と体力さえあれば食べていける、その上、自分たちには大神氏の末裔という誇りもある、見知らぬ土地を開拓し、作物を収穫する、誰もいないのだから当然警察なんかいない、そんな場所で私有財産を作るのだから、それを狙う盗賊も出てくる、財産はある、狙うヤツもいる、でも警察もいないとなれば、自ら武装し、自分の命は自分で守る、これが中世の武士の姿なのです。強くたくましい中世の佐伯一族の姿が少しだけみえた気がします。

戦国時代に夢とロマンを感じる現代人は、その無秩序さが、かえっていいのでしょうか。知恵と体力と土地、あと運さえあれば大名にも、天下さえ取れた時代にあこがれさえ覚えます。

あなたの職業は何ですか？胸を張って答えられた中世佐伯一族。21世紀に生きる私たちはどうでしょうか…。